

ベジタリアン／ビーガンに関する教員および教員養成学部学生の意識

丸山啓史

(京都教育大学)

Awareness of Teachers and Teacher Training Students on Vegetarian/Vegan

Keishi MARUYAMA

抄録：ベジタリアン／ビーガンである子どもが排除されない学校教育のあり方を考えるために、ベジタリアン／ビーガンに関する教員および教員養成学部学生の意識についてのアンケート調査を実施した。ベジタリアン／ビーガンの人との関わり
に乏しい教員・学生が多いこと、「子どもの健全な成長」に関して多くの教員・学生が「肉を食べること」「魚を食べること」
「牛乳を飲むこと」を重視していること、ベジタリアン／ビーガンである児童生徒のニーズに対応する給食が学校において
保障されるべきであるとする教員・学生は少ないこと、アニマルウェルフェアやアニマルライツに関係する問題について
知る機会の乏しかった学生が多いこと、畜産の環境負荷について知る機会の乏しかった学生も少なくないことなどが明らか
になった。

キーワード：ベジタリアン，ビーガン，教員，教員養成学部学生，意識

Key Words：vegetarian, vegan, teacher, teacher training students, awareness

I. 問題と目的

多様な子どもを包摂する学校教育を実現していくうえでは、ベジタリアン／ビーガンである子どもをめぐる課題を検討していくことも重要であろう。丸山（2025）による調査でも示されているように、学校に通う時期からベジタリアン／ビーガンである子どもが存在する。現在の日本においては極めて少数であるとしても、ベジタリアン／ビーガンであろうとする子どもの存在が軽視されるべきではない。

学校の給食や学校の食堂がベジタリアン／ビーガンに対応していないことなどによって、ベジタリアン／ビーガンである子どもは学校生活において困難を抱えることがある（丸山,2025）。日本の国外の研究においては、ベジタリアン／ビーガンである子どもが学校教育のなかで排除を経験しがちであることが指摘されてきた。Pedersen（2010）は、スウェーデンの後期中等教育学校におけるフィールド調査を行い、校外学習の際に自分で自身の食べものを用意するベジタリアン／ビーガンの子どもの多数派のグループから排除されてしまうことなどを示している。Castro（2023）は、ビーガンの子どもの親を対象とする国際的アンケート調査を行い、食事への配慮がなされないことによってビーガンの子どもの学校の遠足や修学旅行に参加しにくくなっていることなどを示している。また、Marshall（2023）は、ビーガンの中学生を対象とする調査を英国で行い、彼らが孤立感を抱いていることなどを示している。

ベジタリアン／ビーガンである子どもが排除されない学校教育のあり方が考えられなければならない。しかし、日本において、ベジタリアン／ビーガンに関する研究は乏しく、ベジタリアン／ビーガンである子どもの教育をめぐる研究は皆無に近い。特別ニーズ教育に関する議論や研究のなかでも、ベジタリアン／ビーガンである子どもの存在は注目されてこなかった。学校の給食に関する議論や研究をみても、ベジタリアン／ビーガンである子どもの存在はほとんど視野の外に置かれており、「食マイノリティ」に目を向ける山ノ内・四方（2021）もベジタリアン／ビーガンの子どものには着目していない。そして、動物倫理に関する議論、「動物の権利」に関する議論、ビーガニズムに関する議論のなかでは、教育をめぐる問題が重視されていない（浅野,2021, 田上,2021, 井上,2022）。

そうしたなか、ベジタリアン／ビーガンに関する数少ない研究においては、ベジタリアン／ビーガンに対する無理解や否定的態度が日本の社会のなかに存在していることが示されてきた。ベジタリアンである8名の成人を対象とするインタビュー調査を実施した角田（2011）は、「日本の食の常識」に基づく教育、「バランス良く食べる」ことを重視する教育がベジタリアンに対する社会的圧力に結びつくことを指摘しており、ベジタリアンとして生活することを近親者からの干渉によって妨げられる人が珍しくないことを示している。そして、ベジタリアン／ビーガンである8名の成人を対象とするインタビューを実施した丸山（2025）は、ベジタリアン／ビーガンであることに對して家族から否定的態度を向けられた人が少なくないこと、ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度が社会のなかに存在することを感じ取っている人が少なくないことを示している。

また、日本の国外の研究をみると、Castro（2023）は、健康とビーガニズムとの関係についての知識の不足、環境問題や気候変動とビーガニズムとの関係についての知識の不足、非ビーガンの営為のもとでの動物の惨状についての知識の不足などを問題にしている。

ベジタリアン／ビーガンである子どもが排除されない学校教育を実現していくためには、ベジタリアン／ビーガンに対する教員の意識を問わなければならない。また、教員養成学部学生の意識にも目を向ける必要がある。

以上のような問題意識のもと、本研究においては、アンケート調査をもとに、ベジタリアン／ビーガンに関する教員および教員養成学部学生の意識を示す。

なお、本研究では、「ベジタリアン」と「ビーガン」を明確には区別していない。なるべく動物性のものを食べないようにしている人を「ベジタリアン／ビーガン」として考えている。本研究では、「ときどきは動物性のものを食べる」「状況によっては動物性のものを食べる」「種類によっては動物性のものを食べる」といった人も、「ベジタリアン／ビーガン」に含めている。

さらに付け加えると、人間による動物の搾取や虐待をなくしていこうとする思想や実践の総体がビーガニズムなのであるから、食生活の面だけで「ビーガン」を考えることは必ずしも妥当ではない。しかし、本研究では、さしあたり食生活に焦点を当てて、ベジタリアン／ビーガンに関する教員および教員養成学部学生の意識を探る。

Ⅱ. 方 法

1. 教員を対象とするアンケート調査

A大学において実施された講習に参加した教員66人を対象とするアンケート調査を実施し、64人から回答を得た（回答率は97.0%）。回答者が勤務している学校の学校種についての回答は、「小学校」が12人（18.6%）、「中学校」が11人（17.2%）、「高等学校」が5人（7.8%）、「特別支援学校」が36人（56.3%）であった。回答者の教員歴についての回答は、「3年未満」が22人（34.4%）、「10年未満」が12人（18.8%）、「20年未満」が16人（25.0%）、「20年以上」が14人（21.9%）であった。

調査の時期は、2025年8月である。

調査においては、回答は任意であること、アンケートの結果を目的外では使用しないことを文書で説明し、無記名での回答を求めた。

アンケートにおいては、「なるべく動物性のものを食べないようにしている人」を「ベジタリアン／ビーガン」と表現していること、「ときどきは動物性のものを食べる、状況によっては動物性のものを食べる、種類によっては動物性のものを食べる、といった人」も「ベジタリアン／ビーガン」に含めることを、説明として記した。

調査の内容は、以下の通りである。①回答者が勤務している学校の学校種と、回答者の教員歴。②教員生活のなかでベジタリアン／ビーガンの児童生徒に出会ったことの有無。③「ビーガン (vegan)」という言葉について、「意味を知っていた」「見聞きしたことはあった」「見聞きした覚えはない」という選択肢からの回答を求めた（単一回答）。④身近なところにベジタリアン／ビーガンの人がいるかどうかについて、「自分自身がベジタリアン／ビーガンである」「家族のなかにベジタリアン／ビーガンの人がいる（いた）」「親しい人のなかにベジタリアン／ビーガンの人がいる（いた）」「知り合いのなかにベジタリアン／ビーガンの人がいる（いた）」「ベジタリアン

／ビーガンの知り合いは思い浮かばない」という選択肢からの回答を求めた（複数回答）。⑤ベジタリアン／ビーガンの食生活について、「望ましいと思う」「望ましくないと思う」「本人の自由だと思う」「健康に良さそう」「健康に悪そう」「環境に良さそう」「環境に悪そう」「食費が少なくすみそう」「食費が多くなりそう」という選択肢からの回答を求めた（複数回答）。⑥非ベジタリアン／非ビーガンの食生活について、「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」について、「子どもの健全な成長」との関係での考えを問い、「不可欠である」「重要である」「必要ではない」という選択肢からの回答を求めた。⑦「ベジタリアン／ビーガンである児童生徒の給食」「宗教上の理由で食べられないものがある児童生徒の給食」「食物アレルギーを有する児童生徒の給食」について、「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」「弁当の持参によって対応すべき」「特別な対応をする必要はない」「その他」という選択肢からの回答を求めた。⑧「ベジタリアン／ビーガン（と教育）について、お考えのこと」について、自由記述回答を求めた。

2. 教員養成学部学生を対象とするアンケート調査

A大学の教員養成学部在籍する2年次の大学生（以下、学生）312人を対象とするアンケート調査を実施し、131人から回答を得た（回答率は42.0%）。

調査の時期は、2025年9月である。

調査においては、回答は任意であること、アンケートの結果を目的外では使用しないことを文書で説明し、無記名での回答を求めた。

アンケートにおいては、「なるべく動物性のものを食べないようにしている人」を「ベジタリアン／ビーガン」と表現していること、「ときどきは動物性のものを食べる、状況によっては動物性のものを食べる、種類によっては動物性のものを食べる、といった人」も「ベジタリアン／ビーガン」に含めることを、説明として記した。

調査の内容は、教員を対象とするアンケート調査と同様であるが、「回答者が勤務している学校の学校種」「回答者の教員歴」「教員生活のなかでベジタリアン／ビーガンの児童生徒に出会ったことの有無」に関する質問は除いた。一方で、「大学に入るまでの学校教育の経験」に関する質問を加えた。「とても狭い檻を用いた養豚が問題になっていること」「とても狭い檻を用いた養鶏が問題になっていること」「鶏卵生産の過程で雄のひよこが殺処分されていること」「牛乳生産の過程で雌牛の人工授精・妊娠・出産が繰り返されていること」「畜産のために南米の森林が破壊されてきていること」「畜産が大量の温室効果ガスを排出していること」について、「学校で学んだ」「学校で学んだ覚えはない」「学校以外のところで知った」という選択肢からの回答を求めた（複数回答）。

Ⅲ. 結果と考察

1. ベジタリアン／ビーガンの児童生徒の存在

教員を対象とするアンケート調査においては、「教員生活のなかでベジタリアン／ビーガンの児童生徒に出会ったことがありますか？」という質問を行った。61人（95.3%）が「ない」と回答し、3人（4.7%）が「ある」と回答した。「ある」と回答した人がベジタリアン／ビーガンの児童生徒に出会った学校の学校種についての回答は、「小学校」が1人、「高等学校」が1人、「特別支援学校」が1人であった。ベジタリアン／ビーガンの児童生徒は極めて少ないことがうかがえる。

しかし、アンケート調査の結果は、ベジタリアン／ビーガンの児童生徒が皆無ではないことも示している。ベジタリアン／ビーガンの児童生徒の存在が無視されるべきではないだろう¹⁾。

2. ベジタリアン／ビーガンの人との関わり

表1は、「ビーガン」という言葉の認知についての回答を示したものである。「見聞きした覚えがない」という回答も見られるものの、教員の71.9%、学生の76.3%が「意味を知っていた」と回答しており、「ビーガン」という言葉はかなり認知されていることがわかる²⁾。

表1 「ビーガン (vegan)」という言葉の認知

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
意味を知っていた	46 (71.9%)	100 (76.3%)
見聞きしたことはあった	13 (20.3%)	29 (22.1%)
見聞きした覚えがない	5 (7.8%)	2 (1.5%)

一方で、「身近なところにベジタリアン/ビーガンの人はいますか?」という質問に対する回答は、表2の通りであった。「ベジタリアン/ビーガンの知り合いは思い浮かばない」という回答が、教員では73.4%、学生では87.8%に及んだ。「家族のなかにベジタリアン/ビーガンの人がいる (いた)」という回答や「親しい人のなかにベジタリアン/ビーガンの人がいる (いた)」という回答は、とても少なかった。「自分自身がベジタリアン/ビーガンである」という回答は皆無であった。

表2 ベジタリアン/ビーガンの人との関わり (複数回答)

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
自分自身がベジタリアン/ビーガンである	0 (0.0%)	0 (0.0%)
家族のなかにベジタリアン/ビーガンの人がいる (いた)	1 (1.6%)	1 (0.8%)
親しい人のなかにベジタリアン/ビーガンの人がいる (いた)	4 (6.3%)	0 (0.0%)
知り合いのなかにベジタリアン/ビーガンの人がいる (いた)	13 (20.3%)	15 (11.5%)
ベジタリアン/ビーガンの知り合いは思い浮かばない	47 (73.4%)	115 (87.8%)

もちろん、ベジタリアン/ビーガンの人が身近に存在しないからといって、ベジタリアン/ビーガンに対する教員・学生の態度が排他的になるとは限らない。また、ベジタリアン/ビーガンの人が身近に存在していても、ベジタリアン/ビーガンに対する態度が受容的になるとも限らない³⁾。しかし、ベジタリアン/ビーガンの人が身近にいることは、ベジタリアン/ビーガンについての理解を深める契機になり得る。ベジタリアン/ビーガンの人との関わりに乏しい教員・学生が多いことは、ベジタリアン/ビーガンである子どもが排除されない学校教育の実現にとって、望ましいことではないだろう。

なお、表2に示された結果に関しては、ベジタリアン/ビーガンに関する他の調査の結果との食い違いを指摘することができる。森 (2023) などが参照している「日本のベジタリアン・ヴィーガン・フレキシタリアン人口調査」では、2023年1月に実施されたアンケート調査の結果について、「ベジタリアン4.5%とヴィーガン2.4%の合計6.9%から、両方に重複した割合1.0%を差し引き、23年1月時点の日本のベジタリアン率は5.9%となりました」と述べられている⁴⁾。しかし、本研究のアンケート調査では、回答者の「ベジタリアン率」は0.0%であった。このような食い違いが生じた理由を調査結果から明らかにすることはできないが⁵⁾、日本におけるベジタリアン/ビーガンの実態についてはさらなる調査が求められよう。

3. ベジタリアン/ビーガンの食生活についての意識

表3は、「ベジタリアン/ビーガンの食生活について、どのように思いますか?」という質問に対する回答を示したものである。教員の96.9%、学生の85.5%が「本人の自由だと思う」と回答している。教員の14.1%、学生の26.0%が「健康に悪そう」と回答しているものの、教員の12.5%、学生の16.0%が「健康に良さそう」と回答しており、表3に示された結果を見る限りでは、ベジタリアン/ビーガンの食生活に対しての否定的な意識が教員・学生のなかに広く存在しているとは言えない。

ただし、ベジタリアン/ビーガンの食生活に関して、「望ましくないと思う」と回答した教員・学生が少ない一方で、「望ましいと思う」と回答した教員・学生も少ない。「環境に悪そう」と回答した教員・学生が少ない一

方で、「環境に良さそう」と回答した教員・学生も少ない。30%以上の教員・学生に選ばれた回答は「本人の自由だと思う」だけであり、「望ましいと思う」「望ましくないと思う」「環境に良さそう」「環境に悪そう」「食費が少なくすみそう」という回答を選んだ教員・学生は5%にも満たない。

表3に示された結果は、ベジタリアン/ビーガンの食生活についての評価・判断をもっている教員・学生が少ないことを意味している可能性がある。ベジタリアン/ビーガンの食生活に対する関心が薄い教員・学生が多いのかもしれない。

表3 ベジタリアン/ビーガンの食生活についての意識（複数回答）

	教員 (n=64)		学生 (n=131)	
本人の自由だと思う	62	(96.9%)	112	(85.5%)
望ましいと思う	2	(3.1%)	3	(2.3%)
望ましくないと思う	1	(1.6%)	9	(6.9%)
健康に良さそう	8	(12.5%)	21	(16.0%)
健康に悪そう	9	(14.1%)	34	(26.0%)
環境に良さそう	1	(1.6%)	5	(3.8%)
環境に悪そう	0	(0.0%)	3	(2.3%)
食費が少なくすみそう	2	(3.1%)	6	(4.6%)
食費が多くかかりそう	7	(10.9%)	17	(13.0%)

4. 非ベジタリアン/非ビーガンの食生活についての意識

アンケート調査においては、「非ベジタリアン/非ビーガンの食生活」に関する質問を行った。「子どもの健全な成長」にとっての「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」の位置づけについて質問した。

表4は、「肉を食べること」についての回答を示したものである。教員の32.8%,学生の42.7%は、「不可欠である」と回答していた。また、教員の64.1%,学生の55.0%は、「重要である」と回答していた。「必要ではない」と回答した教員・学生はわずかであり、「望ましくない」と回答した教員・学生は皆無だった。

表4 肉を食べることについての意識

	教員 (n=64)		学生 (n=131)	
不可欠である	21	(32.8%)	56	(42.7%)
重要である	41	(64.1%)	72	(55.0%)
必要ではない	2	(3.1%)	3	(2.3%)
望ましくない	0	(0.0%)	0	(0.0%)
無回答	0	(0.0%)	0	(0.0%)

表5は、「魚を食べること」についての回答を示したものである。教員の34.4%,学生の45.0%は、「不可欠である」と回答していた。また、教員の64.1%,学生の51.9%は、「重要である」と回答していた。「必要ではない」と回答した教員・学生はわずかであり、「望ましくない」と回答した教員・学生は皆無だった。

表5 魚を食べることについての意識

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
不可欠である	22 (34.4%)	59 (45.0%)
重要である	41 (64.1%)	68 (51.9%)
必要ではない	1 (1.6%)	4 (3.1%)
望ましくない	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表6は、「牛乳を飲むこと」についての回答を示したものである。教員の26.6%、学生の32.1%は、「不可欠である」と回答していた。また、教員の53.1%、学生の61.8%は、「重要である」と回答した。「必要ではない」と回答した教員・学生は少なく、「望ましくない」と回答したのは1人だけだった。

表6 牛乳を飲むことについての意識

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
不可欠である	17 (26.6%)	42 (32.1%)
重要である	34 (53.1%)	81 (61.8%)
必要ではない	11 (17.2%)	8 (6.1%)
望ましくない	1 (1.6%)	0 (0.0%)
無回答	1 (1.6%)	0 (0.0%)

アンケート調査においては、「子どもの健全な成長」にとっては「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」が求められると考える教員・学生が多いことが示された。ベジタリアン/ビーガンの食生活は「子どもの健全な成長」にとっては問題があるとする教員・学生が多いのかもしれない。

一方で、ベジタリアン/ビーガンをめぐる近年の議論や研究においては、ベジタリアン/ビーガンの食生活の栄養面には大きな問題がないことが指摘されている(ファーガソン,2023, 井上,2023, 森,2023, 仲本,2024)。大坂(2022)は、菜食者への対応を管理栄養士に求める立場から、管理栄養士養成施設学生を対象として、ベジタリアン/ビーガンに関する調査を行っている。福嶋ら(2024)は、「適切に計画されたヴィーガン食」は人間の健康にとって問題がないという認識のもと、「入院患者向けヴィーガン食」についての研究を実施している。趙ら(2024)は、学生アスリートが「ヴィーガンの食事」を取り入れることを想定した研究を行っている。

このような議論や研究と、アンケート調査において示された教員・学生の意識との間には、軽視できない食い違いがある⁶⁾。ベジタリアン/ビーガンの食生活をめぐる近年の議論や研究をふまえると、少なくとも栄養面に関しては、「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」が人間にとって「不可欠である」とは考えにくい。それにも関わらず、多くの教員・学生が「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」を「不可欠である」と考えているのである。

もちろん、「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」を重視することが、ベジタリアン/ビーガンに対する排他的態度に必ず結びつくわけではない。しかし、「肉を食べること」等を「重要である」と考えるならば、ベジタリアン/ビーガンの食生活は否定的なものとして映りやすいだろう。「肉を食べること」等を「不可欠である」と考えるならば、ベジタリアン/ビーガンの食生活は許容しがたいものになる可能性が高い。そして、ベジタリアン/ビーガンの食生活が受け入れられにくい環境のもとでは、ベジタリアン/ビーガンである児童生徒が排除されない学校教育の実現は困難なものになりやすいと考えられる。

5. 学校の給食についての意識

アンケート調査においては、学校の給食についての意識に関する質問を行った。

表7は、「ベジタリアン/ビーガンである児童生徒の給食」についての回答を示したものである。「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」という回答は、教員の18.8%、学生の23.7%にとどまった。教員の70.3%、学生の68.7%が、「弁当の持参によって対応すべき」と回答した。

表7 ベジタリアン/ビーガンである児童生徒の給食について意識

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき	12 (18.8%)	31 (23.7%)
弁当の持参によって対応すべき	45 (70.3%)	90 (68.7%)
特別な対応をする必要はない	6 (9.4%)	9 (6.9%)
その他	6 (9.4%)	1 (0.8%)
無回答	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表8は、「宗教上の理由で食べられないものがある児童生徒の給食」についての回答を示したものである。「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」という回答は、教員の39.1%、学生の35.1%であった。「宗教上の理由で食べられないものがある児童生徒の給食」について「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」と考える教員・学生は、「ベジタリアン/ビーガンである児童生徒の給食」について「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」と考える教員・学生よりも多かった。

表8 宗教上の理由で食べられないものがある児童生徒の給食について意識

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき	25 (39.1%)	46 (35.1%)
弁当の持参によって対応すべき	36 (56.3%)	80 (61.1%)
特別な対応をする必要はない	1 (1.6%)	3 (2.3%)
その他	3 (4.7%)	2 (1.5%)
無回答	2 (3.1%)	0 (0.0%)

表9は、「食物アレルギーを有する児童生徒の給食」についての回答を示したものである。「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」という回答は、教員の81.3%、学生の72.5%に及んだ⁷⁾。「食物アレルギーを有する児童生徒の給食」について「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」と考える教員・学生は、「ベジタリアン/ビーガンである児童生徒の給食」について「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」と考える教員・学生よりも大幅に多かった。

表9 食物アレルギーを有する児童生徒の給食について意識

	教員 (n=64)	学生 (n=131)
児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき	52 (81.3%)	95 (72.5%)
弁当の持参によって対応すべき	14 (21.9%)	33 (25.2%)
特別な対応をする必要はない	1 (1.6%)	2 (1.5%)
その他	2 (3.1%)	1 (0.8%)
無回答	0 (0.0%)	0 (0.0%)

教員・学生の回答の背景にある考えを調査結果から詳しく知ることはできないが、「ベジタリアン／ビーガンである児童生徒の給食」については、「宗教上の理由で食べられないものがある児童生徒の給食」や「食物アレルギーを有する児童生徒の給食」と比べても、「児童生徒のニーズに対応する給食を保障するべき」と考える教員・学生が少ないことがわかる。

ベジタリアン／ビーガンである児童生徒に「ニーズに対応する給食」が保障されないことは、ベジタリアン／ビーガンである児童生徒の学校生活に困難をもたらしかねない⁸⁾。ベジタリアン／ビーガンである児童生徒への給食の保障に否定的・消極的な教員・学生が多いことは、ベジタリアン／ビーガンが排除されない学校教育の実現に親和的なものではない。

6. アニマルウェルフェアやアニマルライツに関する学びの経験

学生を対象とするアンケート調査においては、「大学に入るまでの学校教育の経験」に関する質問を行った。この質問に対する回答は、表10の通りである。

表10 畜産に関する学校教育の経験（学生）（複数回答）

n=131

	学校で学んだ	学校で学んだ 覚えはない	学校以外の ところで知った
とても狭い檻を用いた養豚が問題になっていること	17 (13.0%)	98 (74.8%)	22 (16.8%)
とても狭い檻を用いた養鶏が問題になっていること	21 (16.0%)	87 (66.4%)	28 (21.4%)
鶏卵生産の過程で雄のひよこが殺処分されていること	15 (11.5%)	88 (67.2%)	32 (24.4%)
牛乳生産の過程で雌牛の人工受精・妊娠・出産が繰り返されていること	14 (10.7%)	85 (64.9%)	40 (30.5%)
畜産のために南米の森林が破壊されてきていること	55 (42.0%)	62 (47.3%)	17 (13.0%)
畜産が大量の温室効果ガスを排出していること	68 (51.9%)	45 (34.4%)	23 (17.6%)

アニマルウェルフェアやアニマルライツに関係する質問項目に着目すると、「学校で学んだ」という回答は、「とても狭い檻を用いた養豚が問題になっていること」では13.0%、「とても狭い檻を用いた養鶏が問題になっていること」では16.0%、「鶏卵生産の過程で雄のひよこが殺処分されていること」では11.5%、「牛乳生産の過程で雌牛の人工受精・妊娠・出産が繰り返されていること」では10.7%であった。そして、いずれの質問項目においても、「学校以外のところで知った」という回答が「学校で学んだ」という回答を上回った。アニマルウェルフェアやアニマルライツに関係する問題が学校ではあまり取り扱われていない様子がうかがえる。

アニマルウェルフェアやアニマルライツに関係する質問項目について、「学校で学んだ」も「学校以外のところで知った」も選択していない学生は、「とても狭い檻を用いた養豚が問題になっていること」では70.2%（92人）、「とても狭い檻を用いた養鶏が問題になっていること」では62.6%（82人）、「鶏卵生産の過程で雄のひよこが殺処分されていること」では64.1%（84人）、「牛乳生産の過程で雌牛の人工受精・妊娠・出産が繰り返されていること」では58.8%（77人）であった。アニマルウェルフェアやアニマルライツに関係する問題について知る機会の乏しかった学生が多いことがうかがえる。

一方で、ベジタリアン／ビーガンが菜食を選ぶ理由の一つは、アニマルウェルフェアやアニマルライツへの関心である。現代社会における畜産の実態を教員・学生があまり認識していない場合には、ベジタリアン／ビーガンが菜食を選ぶ理由の理解が難しくなる可能性が高いのではないだろうか。

7. 畜産の環境負荷に関する学びの経験

表 10 に示された結果について、畜産の環境負荷に関係する質問項目に着目すると、「学校で学んだ」という回答は、「畜産のために南米の森林が破壊されていること」では 42.0%、「畜産が大量の温室効果ガスを排出していること」では 51.9%であった。そして、いずれの質問項目においても、「学校で学んだ」という回答が「学校以外のところで知った」という回答を上回った。学生が畜産の環境負荷について知るうえで、学校教育が小さくない役割を果たしていることがうかがえる。

しかし、表 3 に示されているように、ベジタリアン/ビーガンの食生活について「環境に良さそう」と考える学生は 5 人 (3.8%) でしかない。畜産の環境負荷について知ることは、ベジタリアン/ビーガンの食生活を「環境に良さそう」と考えることには必ずしも結びついていない。

また、畜産の環境負荷に関係する質問項目について、「学校で学んだ」も「学校以外のところで知った」も選択していない学生は、「畜産のために南米の森林が破壊されていること」では 45.0% (59 人)、「畜産が大量の温室効果ガスを排出していること」では 31.3% (41 人) であった。畜産の環境負荷について知る機会の乏しかった学生も少なくないことがうかがえる。

一方で、ベジタリアン/ビーガンが菜食を選ぶ理由の一つは、畜産の環境負荷への関心である。現代社会における畜産の環境負荷を教員・学生があまり認識していない場合には、ベジタリアン/ビーガンが菜食を選ぶ理由の理解が難しくなる可能性が高いのではないだろうか。

8. 「本人の自由」という意識

表 11 および表 12 は、「ベジタリアン/ビーガン (と教育) について、お考えのこと」に関する自由記述回答の結果である。

表 11 「ベジタリアン/ビーガン (と教育)」に関する自由記述回答 (教員)

-
- ・子どもに押しつけるものではないが、メリットデメリットは伝えて本人が選べるようにしたらよいと思う。
 - ・肉を食べる、食べない等の児童の考え方は、本人の自由であり、決して批判することでもないで、おたがいに尊重することが大事だと思う。
 - ・健康に問題がなければ食は個人の自由だと思います。個人的には食=楽しみなので、ベジタリアンの人もそうでない人も一緒に尊重し合って食事が楽しめるといいなと思います。
 - ・基本的に自身の自由だと思うので良いと思いますが、人に強制したり、他に迷惑をかける (自分の主張ばかりする) のは、違うと思います。
 - ・自分自身でその選択をしたのであれば、お弁当などの対応を家庭と相談の上すすめていく方がよい。宗教上であれば、検討が必要かと思う。
 - ・多様なニーズと給食の保障は一緒に考慮することは難しいと考える。給食の想定範囲 (外国籍の子の受入れ等) を超えているのでは?と思うが、それだと公平ではないとも思う。ただ、ヴィーガンは個人の選択なのかな?と思う。
 - ・私自身、エビ・カニアレルギーで、食事には注意しています。アレルギーなど命に関わるものは保障すべきと思います。
 - ・各自の背景には違った文化や生活が必ずあるものである。そのため、各自の「文化」を尊重することは重要である。公教育でもその考えを前提として考えて配慮していかなければならない。
 - ・生活の多様化を給食の中で考えることは難しいと思う。それだけの資本や人手を入れるには、大がかりな資金も必要だし、異物混入ではないが、動物由来の食品の限定も難しくなるし、大豆製品が遺伝子組み換え製品を拒否される場合では、代用品としてどう作っていくのかも難しくはないだろうか。
 - ・親の影響によって子どもの健康状態に問題が起きた場合にはどうなるのか、などの新たな問題があるのではないかと。

- ・出会ったことはないのですが、考えたことはないですが、日本以外では多いイメージがあるので他の国の教育から学べると思います。
- ・一度挑戦してみたいと思っています。

表12 「ベジタリアン／ビーガン（と教育）」に関する自由記述回答（学生）

- ・やるのは自由。押し付ける一部が目立っている様に感じる。
- ・そういう生き方もあるくらいの知識はあってもいいと思うけど、自己責任だよってことも伝えた方がいいんじゃないかなとは思う。自分で肉食べないのも野菜食べないのも自由だけだとそれを周りに押し付けたりするのはダメだし、そのせいで栄養偏って体調壊したりしても誰も助けてくれないし。
- ・その生活をそうではない相手に強いることは間違っていると思う。
- ・人それぞれいろんな考えがあるだろうけど、ベジタリアンやビーガンの人々に私たちのような考えを押し付けるべきではないし、逆に私たちがベジタリアンやビーガンの人々の考えを押し付けられる筋合いはないと思う。
- ・個人の自由だと思うが、他人に強要するのはやめて欲しいと思う。またSNS上でビーガンやベジタリアンを推奨する人は人の意見を聞かなかったり、ニュースのファクトチェックを怠っている人を見かけてしまうので、あまり良い印象を持っていない。
- ・他人に自分の思想を押し付ける過激派の人たちは悪だと思う。
- ・思想自体は本人の自由だと思うが、ベジタリアン／ビーガンとそれ以外に優劣は無く、選択は自由であるということは主張したい。この主張をするに至ったのは、主にSNSにおいてビーガン肯定派の「ビーガンは正しく、それ以外は正しくない」あるいは否定派の「ビーガンは間違っていて、それ以外が正しい」といった極端な意見が見られることによる。
- ・周りに迷惑をかけてはいけない。
- ・本人の自由だと思う。
- ・食べるものは自由。
- ・全く共感できない考え。
- ・家族の関係もあるからそんなに踏み込む事もできないけど、それによっていじめなどに繋がらないように環境整備をすることが大切だと思う。
- ・そういった人たちがいるということを教える必要はあると思う。
- ・多くの人が理解しておく必要はあると思う。
- ・本人の意思に任せることが必要だが、多様な考え方があることを教えることも必要だと思う。
- ・そういう問題があるということをしておくべきだが、信条にかかわる問題であるので、主に事実を客観的な立場で述べる必要があるだろう。
- ・若年層は、ネット上で度々取り上げられる過激なベジタリアンやビーガンの主張を目にする機会が多いことから、彼らに対するイメージは非常に悪いと想定されるため、大学生も含めた子ども達にベジタリアンやビーガンについて丁寧に説明することが求められる。

表3でも示されていたように、「ベジタリアン／ビーガンの食生活」について「本人の自由だと思う」という教員・学生は多い。表11および表12に示された結果を見ても、「本人の自由」「個人の自由」「自身の自由」といった表現を用いた自由記述回答が少なくない。ベジタリアン／ビーガンの信条や選択を「本人の自由」ととらえる意識は、その信条や選択を尊重する姿勢に結びつき得るため、ベジタリアン／ビーガンである子どもが排除されない学校教育の実現を支える可能性をもつだろう。

しかし、表7に示されているように、「ベジタリアン／ビーガンである児童生徒の給食」について「児童生徒のニーズに対応する給食を保障すべき」と考える教員・学生は少ない。表11および表12に示された結果を見ても、

ベジタリアン/ビーガンの「自由」を保障する具体的方策に言及する自由記述回答は目立たない。ベジタリアン/ビーガンの信条や選択を「本人の自由」ととらえる意識は、その「自由」を保障する手立てを積極的に支持する意識には必ずしも結びつかないのかもしれない。

また、表 11 および表 12 に示された結果を見ると、「野菜食べないのも自由」というように、非ベジタリアン/非ビーガンの「自由」に言及する自由記述回答がみられる。「おたがいに尊重すること」「尊重し合って」というように、非ベジタリアン/非ビーガンの尊重に言及する自由記述回答もみられる。そして、ベジタリアン/ビーガンの信条や選択の「押し付け」に批判的に言及する自由記述回答が少なくない。

現在の日本において、学校の給食は非ベジタリアン/非ビーガンである児童生徒を標準として実施されている。丸山（2025）によっても示されているように、ベジタリアン/ビーガンである子どもは、学校生活のなかで非ベジタリアン/非ビーガンの食生活の「押し付け」に直面することになる。それにも関わらず、アンケート調査においては、非ベジタリアン/非ビーガンからのベジタリアン/ビーガンに対する「押し付け」に言及する自由記述回答が少ない一方で、ベジタリアン/ビーガンからの非ベジタリアン/非ビーガンに対する「押し付け」に批判的に言及する回答が少なからず見られた。マジョリティによるマイノリティに対する「押し付け」ではなく、マイノリティによるマジョリティに対する「押し付け」が批判されている。

食生活等に関する信条や選択を「本人の自由」ととらえる意識は、非ベジタリアン/非ビーガンの「自由」を特に重視する意識と両立し得るものであり、ベジタリアン/ビーガンの信条や選択に対する否定的・批判的な態度と結びつく可能性がある。

ベジタリアン/ビーガンである子どもが排除されない学校教育の実現を考えていくうえで、ベジタリアン/ビーガンの信条や選択を「本人の自由」ととらえる意識については、さらなる検討が必要であろう。

IV. まとめ

アンケート調査においては、ベジタリアン/ビーガンの人との関わりに乏しい教員・学生が多いことが示された。また、「子どもの健全な成長」に関して多くの教員・学生が「肉を食べること」「魚を食べること」「牛乳を飲むこと」を重視していること、ベジタリアン/ビーガンである児童生徒のニーズに対応する給食が学校において保障されるべきであると考える教員・学生は少ないことが明らかになった。さらに、アニマルウェルフェアやアニマルライツに関係する問題について知る機会の乏しかった学生が多いこと、畜産の環境負荷について知る機会の乏しかった学生も少なくないことが把握された。アンケート調査によって示された教員・学生の意識の実態は、全体としてみると、ベジタリアン/ビーガンである子どもが排除されない学校教育の実現に親和的なものではない。

ただし、本研究におけるアンケート調査は、小規模なものであるため、日本における教員・学生の意識の実態が十分に反映されていない可能性もある。ベジタリアン/ビーガンに関する教員・学生の意識については、より大規模な調査が求められよう。また、教員・学生の意識を詳しく把握するためには、インタビューによる質的調査が必要になるだろう。

ベジタリアン/ビーガンに関する教員・学生の意識をふまえながら、ベジタリアン/ビーガンが排除されない学校教育の実現について考えていかなければならない。

注

1) ベジタリアン/ビーガンの児童生徒が少ないことは、ベジタリアン/ビーガンが排除されない学校教育が推進されにくい原因であるかもしれないが、ベジタリアン/ビーガンが排除されない学校教育が実現していないことの結果であるのかもしれない。非ベジタリアン/非ビーガンに適合的な学校教育が展開されることによって、非ベジタリアン/非ビーガンが再生産されていることが考えられる。動物の身体や分泌物を食べることが標準とされることで、学校においてベジタリアン/ビーガンの実践は周辺化されていく（Cole &

Stewart,2014, Repka,2019)。

- 2) 趙ら (2024) が「女子体育大学生」を対象に 2022 年に実施したアンケート調査においては、「ヴィーガンについて知っていますか?」という質問について、「正確に知っていた」という回答が 12.4%, 「正確ではないが知っていた」という回答が 36.0%, 「言葉だけは知っていた」という回答が 20.5%, 「知らなかった」という回答が 30.4%であった。
- 3) 角田 (2011) は, 日本におけるインタビュー調査をもとに, 家族などの近親者からの干渉によってベジタリアンになることを妨げられる人が少なくない状況を提示している。また, 丸山 (2025) も, 日本におけるインタビュー調査をもとに, ベジタリアン/ビーガンが家族から否定的態度を向けられがちなる状況を提示している。
- 4) <https://vegewel.com/ja/style/statistics3>. 2025 年 10 月 16 日に最終閲覧。
- 5) 調査方法や調査対象の違いが結果の違いに反映されている可能性がある。何らかの理由によってベジタリアン/ビーガンの人が教員という職業から遠ざけられていることも考えられる。
- 6) 佐藤 (2015) やドゥソルニエ (2020) は, 牛乳の摂取が人間の健康に悪影響を及ぼす可能性を指摘している。しかし, そのような指摘は, 教員・学生の意識に大きな影響を与えていないようである。
- 7) 教員の 21.9%, 学生の 25.2%が「弁当の持参によって対応するべき」と回答していること, 教員の 1.6%, 学生の 1.5%が「特別な対応をする必要はない」と回答していることにも留意が必要であろう。文部科学省が 2015 年に公表した「学校給食における食物アレルギー対応指針」では, 「学校給食における食物アレルギー対応の大原則」の第 1 項において「食物アレルギーを有する児童生徒にも, 給食を提供する」と述べられている。
- 8) Chepner (2020) は, 学校におけるビーガン食の欠落を問題視し, ビーガンの子どもの食事については植物ベースの選択肢が用意されるべきことを述べている (pp.108-109)。Castro (2023) も, 学校の食堂でビーガンの選択肢が十分に用意されていないことを問題にしている (pp.26-40)。

参考文献

- 浅野幸治 (2021) ベジタリアン哲学者の動物倫理入門. ナカニシヤ出版。
- Castro, M. L. (2023) Vegan students' discrimination and bullying at school. [Unpublished master's thesis]. Åbo Akademi University.
- Chepner, L. (2020) Veducated!: An educator's guide for vegan-inclusive teaching. Vegan Publishers.
- 趙秋華・古泉佳代・萩原香穂・畠山祈・八百則和 (2024) 学生アスリートにおけるヴィーガンの知識レベルの実態. 日本女子体育大学スポーツトレーニングセンター紀要, 27, 27-34.
- Cole, M. & Stewart, K. (2014) Our children and other animals. Routledge.
- ドゥソルニエ, エリーズ (2020) 牛乳をめぐる 10 の神話. 井上太一訳, 緑風出版.
- ファーガソン, パメラ (2023) ビーガン食の栄養ガイド. 井上太一訳, 緑風出版.
- 福嶋伸子・福嶋寛明・山尾麗・和田恵美子・佐藤久美子・壁村哲平 (2024) 入院患者向けヴィーガン食導入後の評価. 福岡女子短大紀要, 89, 65-76.
- 井上太一 (2022) 動物倫理の最前線—批判的動物研究とは何か. 人文書院.
- 井上太一 (2023) 今日からはじめるビーガン生活. 亜紀書房.
- Marshall, H. (2023) Vegan children in English secondary schools: Challenging norms and personal impacts [Unpublished doctoral thesis]. University of Chester.
- 丸山啓史 (2025) ベジタリアン/ビーガンをめぐる教育の課題—インタビュー調査から. 京都教育大学紀要, 146, 1-16.
- 森映子 (2023) ヴィーガン探訪—肉も魚もハチミツも食べない生き方. KADOKAWA.
- 仲本桂子 (2024) ベジタリアン・ヴィーガンの栄養学. 鶴田静・垣本充・加藤裕子・仲本桂子・山形謙二・いけやれいこ・中川雅博・宮城智央・橋本晃一・高井明德, まるごと解説 ベジタリアン&ヴィーガンの世界. 福音社, 43-75.

- 大坂裕子 (2022) 管理栄養士養成施設学生のヴィーガンに関する認知. 駒沢女子大学研究紀要, 29, 29-36.
- Pedersen, H. (2010) *Animals in schools: Processes and strategies in human-animal education*. Purdue University Press.
- Repka, M. (2019) Intersecting oppressions: The animal industrial complex and the educational industrial complex. In A. J. Nocella II, C. Drew, A. E. George, S. Ketenci, J. Lipinacci, I. Purdy, & J. Leeson-Schatz (Eds.), *Education for total liberation: Critical animal pedagogy and teaching against speciesism*. Peter Lang.
- 佐藤章夫 (2015) 牛乳は子どもによくない. PHP新書.
- 角田尚子 (2011) ベジタリアンを取り巻く日本の状況—食育思想と近親者からの干渉. 佛教大学大学院紀要 社会学研究科篇, 39, 19-36.
- 田上孝一 (2021) はじめての動物倫理学. 集英社.
- 山ノ内裕子・四方利明 (2021) 食マイノリティと多様性—学校給食における食物アレルギーおよび宗教対応をめぐって. 関西大学人権問題研究室紀要, 81, 29-50.